

鈴木繁、ロナルド・スチュワート

『マンガ——批評的ガイド』

Shige (CJ) Suzuki and Ronald Stewart, *Manga: A Critical Guide*

本書は、学術的なコミックス研究の入門書として刊行されているブルームズベリー・コミックス・スタディーズシリーズの中の一つである。このシリーズには、「スーパーヒーロー・コミックス」や「子ども、青少年向けコミックス」などが既刊されており、特定の作家の名を除き、コミックスを冠さないタイトルは本書『マンガ』¹⁾がシリーズ初となる。

Manga が日本のコミックスを表す固有名詞として、海外で認識されて久しい。日本はもとより欧米やアジア諸国でも大学などの高等教育の授業の一つとして、日本のポピュラー文化は人気であり、Manga や Anime はその代表格として取り上げられている。本書はマンガに特化し、第一章「歴史的概観」、第二章「文化社会的影響」、第三章「批評的使用」（研究方法）、第四章「主な事例

須川亜紀子

研究」、という構成で、教科書としても、一般向けのマンガ入門書としてもわかりやすい内容になっている。

「Manga は日本のコミックスを表す固有名詞」と書いたが、歴史的にはその定義は流動的であると本書はまず主張する。第一章歴史的概観では、マンガには「長い伝統」があるという視点や、「国内外で主流となつている手塚治虫中心のマンガ史観」(p.13)に疑問を呈している。例えば、一八七二年明治政府が近代国家建設のためにおこなった文化資源調査によつて、十二世紀に描かれた「鳥獣人物戯画」が国宝に指定された頃、当時のマンガ家たちが手掛けた歴史書では、マンガの起源を「鳥獣人物戯画」に置いていたという。そこには、マンガの正当性や、マンガ家の権威付けという意図がみえる。そこでは、マンガの定義は「ユーモアと



Bloomsbury Academic, 2022

風刺の精神がある画」とされていた。この定義が明治期の近代的印刷メディアにおけるカートゥーンやコミックストリップ（新聞マンガ）につながり、戦後へと至る。つまり、マンガはユーモアを含むカートゥーンやコミックストリップとは同義となったのだが、今日ではその定義は狭すぎるのがわかるだろう。他にもマンガを日本独自のものとする見方の中に、自国（＝西欧）とは異なるものとしてのオリエンタリズムのまなざしにも留意すべきと本書は指摘する。そうした意味でも、「マンガの歴史」を語るうえでの政治性を意識しながら、マンガの歴史を考えると、構成は非常に重要である。第一章では明治、大正期、戦前、戦後のマンガの状況、発展から、マンガ雑誌などによる読者層の拡大に、関することまで網羅している。

コンテクスト化のために歴史的概観の章は本書の半分弱を占めており、これだけでも大変貴重な資料が満載だ。だがそれにとどまらず、マンガに関する社会・文化・政治的な考察もなされているのが本書の特徴である。『はだしのゲン』が二〇一三年に松江市の公立校図書館で閲覧制限されたことや、二〇一四年に掲載された『美味しんぼ』で、主人公が福島原発汚染のせいとされる鼻血を出すシーンに対する批判と政府の弁明など、騒動の背後に隠された政治的動向や、「クールジャパン」の一翼としてマンガをブランド化しようとする政府の思惑についても論じられ、マ

ンガ研究は社会と密接につながっていることを示している。

評者の専門である「オーディエンス／ファン研究」や「ジェンダー研究」に関する項目も興味深い。特に、二〇一〇年東京都の青少年健全育成条例のいわゆる「非実在青少年問題」事例は、マンガやアニメの人気を支えるといったいい、ファンの二次創作（同人誌）などにおける表現の自由とも直結した。ファンが自発的に政治的抗議運動として直接、または二次創作を通じて声をあげたことは、マンガ文化が、著作権者などのステークホルダーだけでなく、多くのファンによって支えられていることが浮き彫りとなった。ファンの二次創作に関しては、現状「グレーゾーン」として著作権法等による厳密な取り締まりは免れているが、いつその状況が変わるかはわからない。この辺りは、日本と他のアジア諸国や欧米諸国では事情が異なる。本書が海外読者によるファン文化における表現の自由、規制、著作権等に関する議論の契機になってほしいと思う。

「ジェンダー」に関する項目では、日本のマンガ雑誌の構造について触れている。日本に暮らす人々にとっては当たり前かもしれないが、対象読者を年齢やジェンダーで区分けし、「少年」「少女」「青年」「女性」マンガ雑誌が、単行本化される前に作品を雑誌連載・掲載することは、実は日本以外の国では珍しいことだ。

欧米、アジア諸国では週刊、月刊のマンガ専門雑誌はほとんどな

い。日本のようなマンガ雑誌文化に触れていない多くのファンたちは、まずアニメを視聴し、その原作であるマンガを現地語に翻訳された単行本やネット上で読む、というのが現在の慣習になっている。本書ではマンガ専門雑誌のカテゴリーをわかりやすく説明するために、少女マンガ雑誌の表紙がパステルカラーなどで彩られて「女性性」が表現されていることや、少年マンガ雑誌の表紙にしばしば水着など肌の露出が多い若い女性グラビアが採用され、異性愛主義の男性がターゲットになっていることなどが言及される。また、日本のジェンダー・ギャップ指数（GII）が低いことにも触れつつ、特に少女マンガがいかに伝統的なジェンダー規範に挑戦してきたかについて、『リボンの騎士』や『ベルサイユのばら』など男装の少女が活躍する作品を論じている。さらに、「24年組」と呼ばれる女性作家による少女マンガでの挑戦、たとえば竹宮恵子や萩尾望都らの「少年愛」作品が、いかに当時の少女たちが直面していたジェンダー問題（しかも直接表現することが難しかった問題）を浮き彫りにしていたかにも触れている。

最後に、第三章ではマンガ研究のための基礎用語を説明したり、ストーリー分析の方法を提示したりと、読者を研究実践へと引き込んでいる。第四章では、『正チャンの冒険』『のらくろ』『タンクタンクロー』など大正、昭和の作品の紹介、さらに手塚治虫、水木しげる、高橋留美子などの作家にフォーカスした解説、そし

て子供向け、少年、少女など対象読者にフォーカスした解説などが展開される。限られたページ数の中でどのマンガ家のどの作品を取り上げるか、著者たちの選択の苦悩が垣間見える章だ。巻末には、マンガ家や作品に関するミュージアムのリストもあり、非常に実用的な構成になっている。マンガ研究の入門書として本書が多く読者の海外読者に読まれ、マンガ研究の裾野が広がってほしいと思う。

注

(1) Manga の翻訳は、「漫画、マンガ、まんが、MANGA」など意味合いの異なる表記があるが、ここでは混乱をさけるため、カタカナの「マンガ」に統一している。